

岡 山 大 学

グローバル・ディスカバリー・

プログラム

記述問題サンプル

【 公 民 】

グローバル・ディスカバリー・プログラム
入試問題サンプル（公民）・オープンキャンパス配布用

資料①と②を読み、問 1～問 3 に答えよ。

資料①

2010 年 11 月に出されたイギリスの雑誌『Economist』は日本特集の号だった。その表紙には、大きな日の丸を背中に抱えてつぶれそうになっている子どもの姿が象徴的に描かれ、「Japan's burden（日本の負担）」という見出しがつけられていた。

そして「日本症候群（Japan Syndrome）」というキーワードとともに、日本が抱える問題の本質は他でもなく高齢化と人口減少にあり、それをいかに克服していくかが日本にとっての課題であり、しかもこの問題は世界各国が日本を追いかけるように直面していく問題なので、日本がそれにどう対応していくかは日本だけの問題にとどまらず、世界が注目しているという趣旨の議論が展開されていた。

私はここまでも述べてきたように、人口減少社会は必ずしもマイナスの事態ではなく、むしろポジティブな可能性を多く含んでいるという考え方をとっているので、この『Economist』の論調やそこで論じられる処方箋——特に市場経済化を進め経済成長をいかに図っていくかが最大のポイントであるといった考え——とは異なる意見をもっているが、とは言え人口減少社会が様々な「大変な問題」を抱えているのは確かなことである。

そうしたクリアすべき課題あるいはハードルのうち、特に大きなものは次のような点だろう。

第一は、言うまでもなく社会保障などの「分配」をめぐる問題である。高度成長期は、経済のパイが拡大を続け、要は「みんなが得をする」時代であり、「分配」の問題など考える必要はなかった。この結果、高度成長期の「成功体験」がしみついている人たちは、今もなお「経済成長がすべての問題を解決してくれる」と考えている。しかしそうした時代では全くないのが現在であり、世代間の公平の問題を含め、私たちは「負担」や「分配」の問題に正面から向き合っていく必要がある。

そのように言うと、何か積極的なビジョンを放棄した、後ろ向きの展望に響くかもしれないが、それは間違っている。そこにはむしろ、現在よりも高福祉・高負担型の、豊かで安心できる成熟社会のビジョンが開けるのである。

（中略）

第二の課題として、人と人との関係性という点がある。

現在の日本社会は、国際比較においてももっとも「社会的孤立度」の高い社会となっている。これは、私自身が以前から様々な形で論じてきた点だが、日本社会あるいは日本人が概して「集団が内側に向かって閉じる」とでも呼ぶべき傾向を強くもち、集団の「ウチ」と「ソト」の区別が強く、集団の内部では過剰なほど気をつかったり同調的な行動をとる

一方で、自分の属する集団の「ソト」に対しては無関心であったり潜在的な敵対性をもつということが背景になっている。

そしてこの点もまた高度成長期に特に強まった傾向であり、そこでは「カイシャ」と「核家族」がそうした閉鎖的な単位となったのだった。

したがって、日本社会の基本的な課題として、個人をベースとする、「集団を超えた（ゆるい）つながり」、や関係性をいかに築いていくかという点がある。これは特別に難しいことを言っているのではなく、見知らぬ者どうしがちょっとしたことで声を掛け合うとか、挨拶やお礼の言葉を口にするといったような、ごく日常的な場面での人と人との関わりに関することだ。

実はこの点に関しても、私は学生や比較的若い世代の行動パターンを見るにつけ、通常言われている「最近の若者は、的な議論とは逆に、むしろそうした成熟社会の「ゆるいつながり」ないし「都市型コミュニティ」に向けた兆しが、（少なくともいわゆる団塊世代前後の人々などに比べて）確実に現れてきているように感じている。

（中略）

課題の第三として、やや難しい言い方になるが、「価値原理」あるいは「精神的なよりどころ」という点を挙げたい。

思うに現在の日本社会あるいは日本人ほど、深い次元で「不安」な人々はいないのではないか。

それは一つには、不景気で雇用が不安定であるとか、老後に関する心配等々といった、経済や現実の生活に関わるものが確かにあり、それは第一の課題として挙げた社会保障や分配の問題にも関わっている。

しかしそれだけではない。それはもっと深いレベルでの、精神的なよりどころあるいは「土台」とも言うべきものが失われているという点に関わっているのではないか。

（中略）

つまり江戸時代までの日本人は、本書の中で論じていくように神道・仏教・儒教といった伝統的な価値を日常的な習慣や年中行事などとともにそれなりに保っていたが、「欧米列強」の軍事力を目の当たりにして衝撃を受け、一方でそうした科学技術を導入すると同時に、（キリスト教を取り入れることはいわば相手方の土俵に乗ってしまうことになるため）「国家神道」という柱を突貫工事で作り上げ、富国強兵の道を突き進んでいった（奇しくもこれは、先ほど見た人口変動の図での急激な上昇と重なっている）。

しかし第二次世界大戦に敗れ、それまでの国家神道は否定されるとともに、それに代わって「経済成長」ということが全ての目標あるいは「価値」となり、今度はひたすらそれに向かって突き進んでいった。そこでは戦前に対する反省もあって、精神的な価値などといったものは考えないほうがよいとされ、物質的な富の拡大あるいは功利的な損得のみに意識を集中させていったのである。

私は戦後の日本社会ほどすべてが「世俗化」、された社会は世界的に見て珍しいと思うし、逆に言えば、戦後の日本では「経済成長」ということが文字通り「信仰」、のようなものに

なったと言ってもよいだろう。

しかし 90 年代前後から、そうしたパターン自体が根本から維持できなくなり、かといって経済成長に代わる価値や土台を見出すこともできず、何をよりどころにすればよいかが見えぬまま、途方にくれているというのが現在の日本社会あるいは日本人ではないだろうか。

(中略)

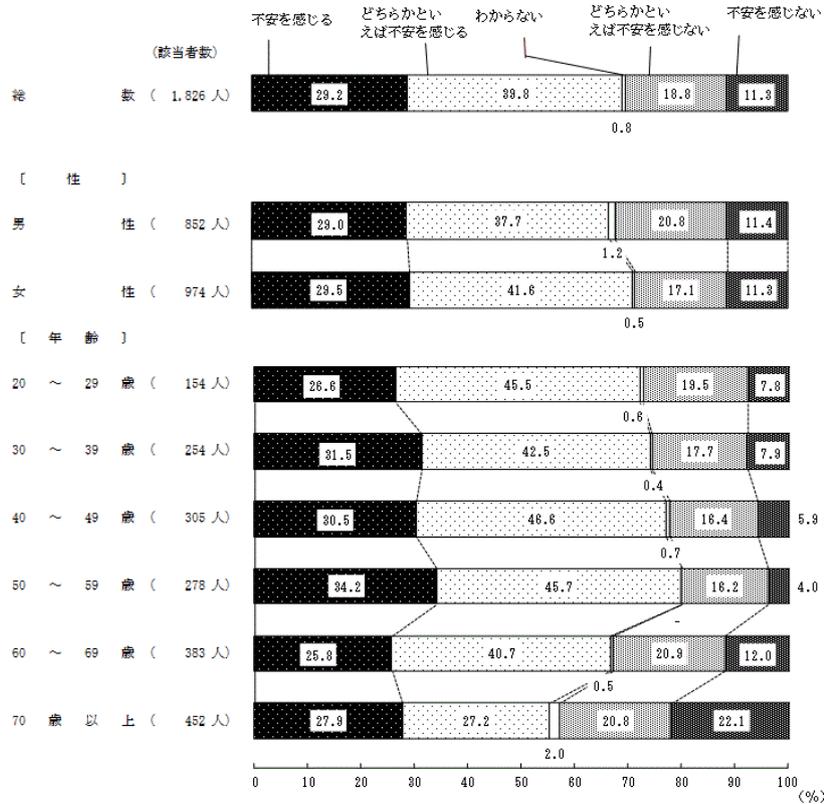
私たちが高度成長期の発想や価値観の枠組みの中で、あるいはその延長線上で物事を考える限り、人口減少社会は敗北あるいは“衰退”に向けた進行としか考えられないだろう。

しかしここまでその一端を記してきたように、新たな視座で状況を見ると、それはむしろ全く逆に、日本社会が真の豊かさを実現していくことに向けての大いなる道標として立ち現れるのである。

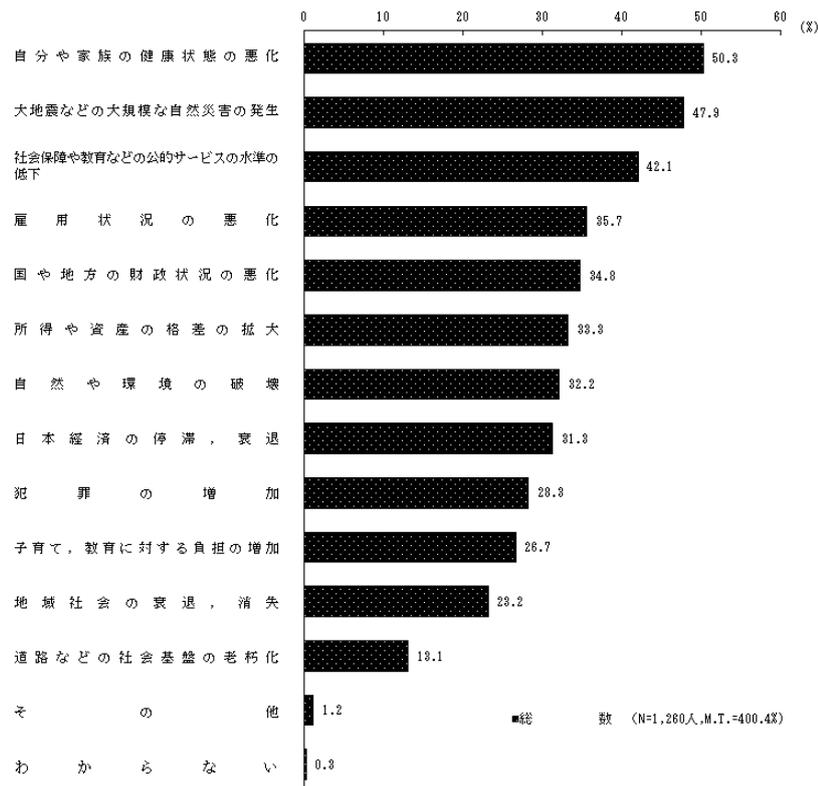
(広井良典『人口減少社会という希望—コミュニティ経済の生成と地球倫理』〔朝日新聞出版、2013 年〕より。問題作成の都合上、一部表記を改めたところがある)。

資料②

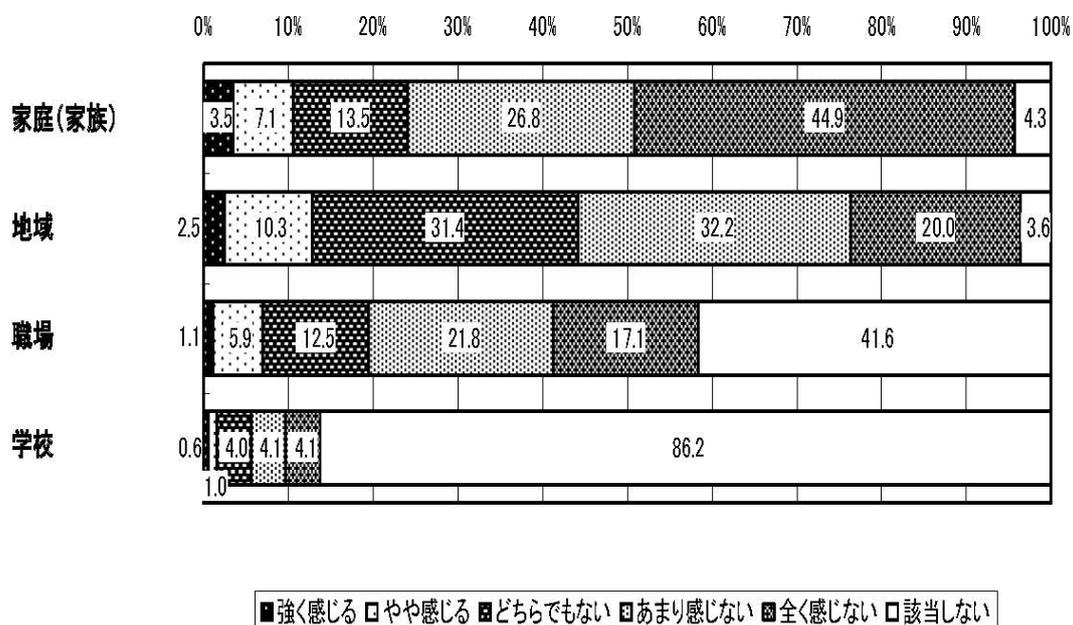
A：自分の将来について不安を感じるかという質問に対する回答の結果



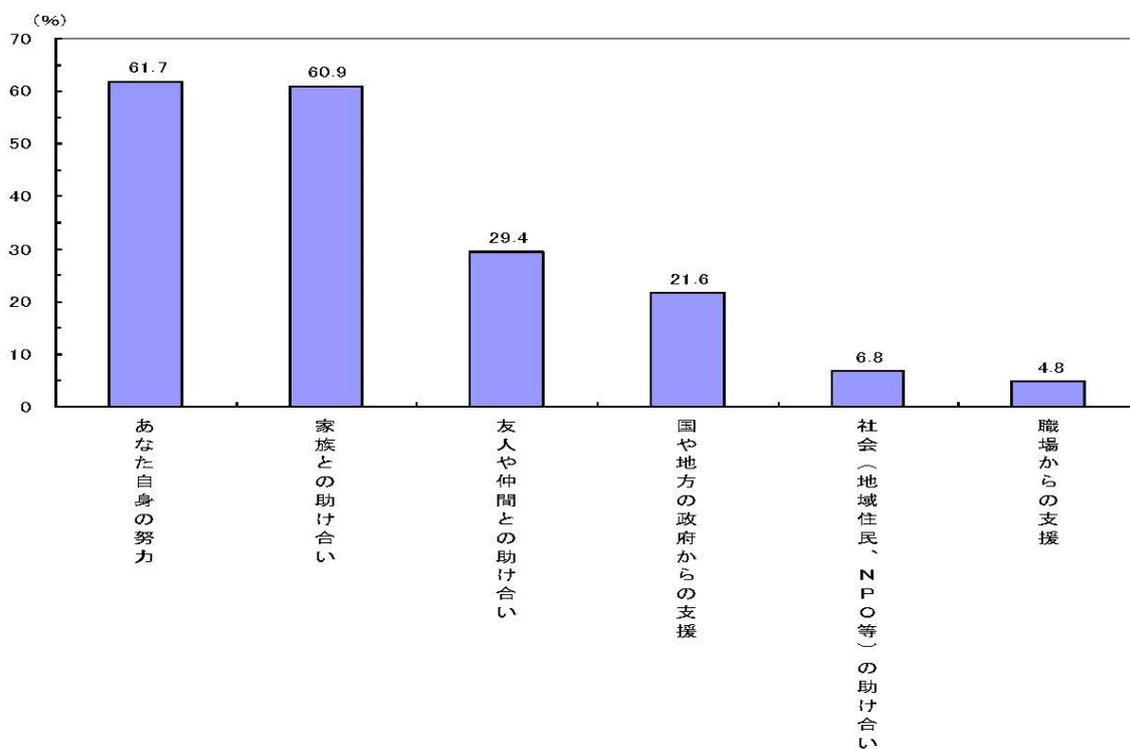
B：Aの質問で「不安を感じる」「どちらかといえば不安を感じる」と答えた人が、どのようなことに不安を感じるかについての回答の結果



C：家庭、地域、職場、学校等の日常生活の様々な場面において孤立感を感じているかという問いに対する回答の結果



D：あなたの幸福感を高めるために有効な手立は何ですかという問いに対する回答の結果。



※A・B は、内閣府「人口、経済社会等の日本の将来像に関する世論調査の概要」（2014年8月調査）より作成。調査は、全国20歳以上の日本国籍を有する者3000人を対象に行われた（有効回収数は1826人）。C・Dは内閣府「平成23年度国民生活選好度調査」（2011年3月調査）より作成。調査は、全国に居住する15歳以上80歳未満の男女4000人を対象に行われた（有効回収数は2802人）。

設問

問1 資料①を読み、筆者は「人口減少社会」をどのようにとらえているか。筆者の指摘する人口減少社会において解決すべき課題をふまえて150字以内でまとめよ。

問2 資料②のA・Bは人口や経済社会などの日本の将来像について行った調査結果の一部であり、C・Dは「幸福感」や「新しい公共」に係る国民意識とともに、生活全般や福祉領域に関する考え方に関する長期的な人々の意識の変化を把握することを目的になされた調査結果の一部である。人々の抱く不安感と幸福感について、A～Dのグラフから読みとれることを100字以内でまとめよ。

問3 資料①と②をふまえ、あなたが考える人口減少社会の抱える課題と解決策について、800字以内で論述せよ。